

## SDGs×キャリア教育融合プログラム「学校BOOKOFF」

主に神奈川県、東京都の小学校 × ブックオフグループホールディングス株式会社

### 取組概要

自社のリユース業を題材としたSDGを学べるカリキュラムを一般社団法人日本文化推進機構と共同で開発。小学校の授業「総合」に活用してもらうことにより、授業の発展に貢献できる。また体験型授業の実施により生徒がSDGsを自分事として捉え、リユースという選択肢を生活に取り入れれたり、日常の中でモノの大切さや、長く使うことへの意識醸成を行い、モノの寿命が延び、ゴミを減らすという社会課題の解決に寄与ができる。



「学校ブックオフ」の概要図



「学校ブックオフ」授業の様子

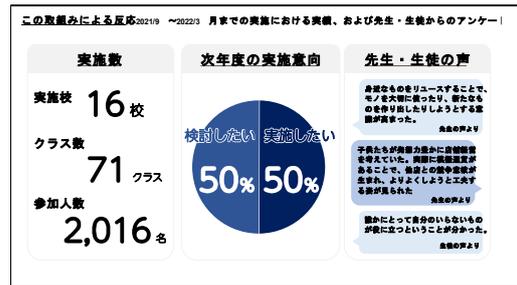
### 基本情報

代表地方公共団体	主に神奈川県、東京都の小学校
代表民間団体	ブックオフグループホールディングス株式会社
他の連携団体等	一般社団法人日本文化推進機構
カテゴリ	環境保全対策／廃棄物（ゴミ）対策／教育プログラム・学力向上
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	2020年9月～2021年10月

### 取組内容



解決した課題 & 解決に向けた手法の概要



本取組を行ったことによる実績と反響

この取組で解決した課題	<p>①【学校視点の課題】キャリア教育、コロナ禍で企業との接点減少：コロナ感染拡大以前は「工場見学」など企業との接点、キャリア教育が行われていたが、コロナ拡大後は対面での取り組みができなくなり、その代わりとなる授業が無いが学校側は模索をしていた。</p> <p>②【学校視点の課題】総合授業での「体験」不足：一方的な講義形式ではなく、体験形式の授業が求められているが、授業形式の変更には学校の理解や様式の変更が必要であり、進めるのは容易ではなく、またカリキュラムの作成、準備に時間がかかるという課題があった。</p> <p>③【企業視点の課題】学校と地域とのつながり：これまでは地域や学校との接点は薄く、自社も職場体験、講演などの取組みや事例はあまり生み出せていない状態だった。</p>
解決に向けた手法	<p>「総合」の授業で使用できる「SDGs」と「キャリア教育」の融合プログラムの開発と提供</p> <p>「教育プログラム：学校ブックオフ」を一般社団法人日本文化推進機構と共同で開発。プログラムは現任教員の方々からアイデアを出し合い作成。自社のリユース事業を中心に、SDGsを体験学習を通して学べる仕様とした。教材データ、先生向けの指導案、ツール類一式を無償提供することで手軽に授業を始められる環境を整備。また、オンラインで学校と近隣店舗をつなぐことによりICT教育にも寄与している。2021年は71クラス、延べ児童数2,000人に授業を行った。事後アンケートでの先生からの反応も好評で、次年度の開催は「ぜひ実施したい」50%「実施できるが検討したい」50%と、実施意向としても好意的な回答を得られており、今後の継続性も期待できる結果となった。</p>

## 取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	日本文化推進機構：学校、担当教員への内容説明、日程アレンジ、教材研究開発委員会の運営 ブックオフ：授業内容作成、日程調整、授業実施 学校：日程調整、授業実施
地域関係者との連携方法	自社のリユース業を中心に主に3R、循環型社会を学べるプログラムを構築。日本文化推進機構に学校との仲介に入ってもらい、導入を進めた。また、各自治体のSDGsの取り組み紹介、出前授業紹介にも掲載を始めている。
資金調達方法	資金調達なし
資金調達方法の補足	
事業推進上の課題・工夫	①体験型プログラムのため、生徒に家から使わなくなったTシャツや本を持参してもらう必要があったが、カリキュラムを実施している中で、保護者の理解を得られずスムーズに集められないという課題があった。そのため、保護者向けの案内を作成し、学校ブックオフの目的や授業内容を伝え、理解を得るような工夫を施した。 ②授業終了後に教員向けにアンケートを実施。その中から実際の授業における進め方やカリキュラムにおける課題・分りにくい部分を洗い出し、スライドの更新・追加や指導案の改定、短縮版の授業プログラムの作成などを適宜行っている。

## 担当者のコメント

生徒にとって身近な企業であり、事業そのものがSDGsに直結している自社の強みを活かして、「教育プログラム：学校ブックオフ」の全国展開を進めています。

- ・3Rを学び、その中でも「リユース」は誰でも簡単にできる取り組みだと気づいてもらうこと
- ・ブックオフの活動を通して、自分にとって使わなくなったモノが誰かにとっては必要なモノになるという視点を学び、リユースへの行動につなげること
- ・マイバック作りを通して、モノを大切にすること、ゴミを減らすことがSDGsの実現になることを知ってもらうこと
- ・査定体験を通してモノを大切にすれば、モノの価値は高まること

これらを通して、最終的には「モノ」への見方が変わり、3Rを意識して生徒ひとりひとりの行動が変化していくことをゴールとして日々、プログラムの展開に尽力しています。

またこのカリキュラムは問題に気づいたり、そこから考える意識を醸成したりする授業としての目的が達成できるのであれば、自由に短縮・アレンジなども可能とし、担当して下さる先生の授業スタイルに合わせた提供を心がけております。よりよい社会・環境・未来のためにぜひご活用いただければ嬉しいです。



担当者の写真

## 優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<p>①地方創生SDGsの視点 未来の担い手である小中高生に向けて「教育プログラム：学校ブックオフ」を行うことにより、社会課題を自らの問題として主体的に捉えられるキッカケを創出する。また、幼少期からESDを行うことにより、環境問題への視点を増やすことで、リユースという選択肢を生活に取り入れ、日常の中でモノの大切さや、長く使うことへの意識醸成を行い、生徒たちやその家族が持っているモノの寿命を延ばすことで、ゴミを減らすという社会課題の解決に寄与ができる。</p> <p>②ステークホルダーとの連携 本プログラムは以下ステークホルダーの強みを活かし、連携・理解を得ることで展開している。 【BOOKOFF】 ビジネスとしてリユース業の専門知識を持っている。 SDGsの12番「つくる責任つかう責任」の知見がある。 教育プログラムのアイデア提供 【日本文化推進機構】 学校・現役教員とのリレーション 教育プログラムの提供事例 【学校】 直接の授業実施、将来を担う子供たちへの教育 実際の教育経験を通じたプログラムのアレンジ、現場の知見 【参加した生徒や保護者の理解】 保護者向けの案内を作成し、学校ブックオフの目的や授業内容を伝え、理解を促している</p> <p>③モデル性・波及性 自社全国750店舗以上の店舗網を活かし、全国展開を積極的に行っている。また、現役教員の方で構成された「教材研究開発委員会」を発足、プログラムが常に教育現場のニーズとマッチできるように定期的にアップデートを行っている。これらのプログラム提供に対して学校はコストをかけずに、大きなリソースをかけることなくカリキュラム導入を行うことが可能となっている。</p>
----------------	---